

## 訪タイ報告書（4 回目）

2024 年 4 月 18 日

加藤 昭宏

### 1. はじめに

今回は、4 回目のタイ・チェンマイへの訪問である（2024 年 3 月 25 日～3 月 29 日）。これまでの 3 回の現地調査から、โรงเรียนพัฒนาต้นน้ำขุนคอง（以下、A 学校）、およびその周辺の村 BAN KHUN KHONG（以下、B 村）の状況として以下のことが確認されていた（加藤（2024）参照）。

- ・B 村の地理的条件（都市部まで約 120km 離れていること、最寄りの病院まで約 30km 離れていること）が子どもたちの学習意欲の低下に結びついている（『どうせ勉強しても、家の農業の仕事をやるだけ』など生徒たちは本物の仕事を知らない」（先生）という）
- ・職業体験を企画したいが、A 学校としても予算が潤沢ではなく、企画出来ない現状がある
- ・教員との家庭訪問を通して、学校を休みがちな生徒の背景として世帯の貧困問題やヤングケアラーの要因がある可能性がある
- ・上記の子どもらに対する教員間の行動の差がある（ある教員曰く、「（自分は）毎日家庭訪問し、子どもたちへ声かけをしているが、自分以外の教員はしていない」「それはなぜだかわからない」とのこと）

また 2 回目の訪問時（2019 年 6 月 27 日～7 月 2 日）では、英語を担当する先生（以下、C 先生）らから話を伺い、生活習慣やリス族の文化の影響もあり、子どもだけでなく親の考えとしても「教育は重要視されていない」現状があることを教えていただいた。そして、まずは A 学校の授業内で「（筆者から）日本での経験や文化等について話してもらえると、子ども達の世界が広がるのではないか」との話をいただいていた（以下、国際福祉教育）。

これらのことから今回の訪問の目的を、①前回訪問した、学校に来られていない子ども宅に教員とともに再訪し、現在の状況を確認すること（4. 5. 参照）、②国際福祉教育の内容を検討するため、さらに子どもらの現状を理解すること（6. 参照）とした。加えて、前回の訪問時「けがをした時などの治療」も行っていると話していた先生が別の学校に異動となった<sup>1)</sup>ため、村内の状況などがどのように変わったかについても確認をすることとした（9. 参照）。

なお、今回は筆者の本務校・同朋大学の学生が複数名（2 年生 1 名、3 年生 4 名）同行希望を申し出てくれた。しかし、学内行事（新年度オリエンテーション）と重なっており、特に 3 年生に関しては実習のオリエンテーションもあることから、今回は 2 年生の学生のみ同行することとなった。同行にあたっては、学内の関係各所と調整し、また学生の保護者の合意、理解を得て実施に至った。

---

1) A 学校は公設であり、教員らは government teacher である。多くの教員はチェンマイ（都市部）に住んでおり、自宅から遠いため、異動希望を出すことが多い様子。今回、窓口となった C 先生も、訪問して初めて「6 月に異動する」と話してくれた。5 年ほど A 学校で働いたというが、毎週日曜日の夜に家を出て、A 学校敷地内にある宿舎に寝泊まりし、金曜日の夕方学校を出て自宅に帰る生活をしているとのこと。

## 2. 全体の行程について

○1日目 2024.3.25 (月)

- ・フィリピン・マニラから移動<sup>2)</sup>し、バンコク（ドンムアン空港）経由で15時にチェンマイへ。
- ・学生と合流し、タクシーにてチェンダオにあるB村へ。

○2日目 2024.3.26 (火)

- ・朝から、村内をアウトリーチ。子どもらと交流。
- ・午後からA学校へ。卒業式の準備の様子を見学。児童・生徒にインタビューを行う。(3.にて詳述)
- その後、前回「学校に来ていなかった」子と再会。本人、先生から話を伺う。(4.にて詳述)

○3日目 2024.3.27 (水)

- ・昨日会った子どもらと交流後、学校へ。
- 家庭訪問。前回の訪問時「ヤングケアラー状態によりあまり学校へ来ていない」児童宅へ。本人、姉ら、C先生から話を伺う。(5.にて詳述)
- ・加えて、C先生から、リス族の現状をヒアリング。A学校へ戻り、再度ヒアリング。(6.にて詳述)
- ・B村へ戻り、昨日会った子ども1名へヒアリング。(7.にて詳述)

○4日目 2024.3.28 (木)

- ・8:30にA学校へ行き、卒業式へ参加。(8.にて詳述)
- ・午後はB村内で過ごす。

○5日目 2024.3.29 (金)

- ・10時に宿を出てチェンマイへ。宿のオーナーの義兄（姉の夫）が日本人で、チェンマイ在住とのことで、急遽、チェンマイ空港付近のカフェで話を聞かせていただけることに。(9.にて詳述)

また宿泊先の確保や移動方法（チェンマイからB村）について、ケン氏<sup>3)</sup>と事前にやり取りをしていた。B村内の宿泊先（ขุนคองโฮมสเตย์ 以下、Dホームステイ）にもメッセージを送るが既読がつかず<sup>4)</sup>、ケン氏に相談したところ、「予約をしておく」とのこと（2月中旬時点）。また当日会えるかどうかについて12月末から連絡しており、「If we're not busy, maybe we can meet each other.」とのことであった。しかしその後何回か確認するも会えるかわからず、当日ドンムアン空港から再度連絡したところ「Now I'm in Phuket. I didn't go back to Chiang Mai.」とのことであった。また宿の予約もなされていないことがそこで発覚し、急遽、チェンマイ空港内で改めて宿泊先の確保や移動方法の検討を余儀なくされた。

今後も同様のことが起こり得ると考えられ、前回と違うタクシー会社に金額等の確認、交渉をしつつ、安定的な宿の確保を可能とするためDホームステイのオーナー（以下、Eさん）と連絡先を交換することなど、今後に向けた準備を意識し今回の調査に臨むこととした。

---

2) 別の用事（フィリピンでのスタディツアー参加）があったため、学生とはチェンマイ空港で合流した。

3) 訪タイ報告書①参照。リス族の方。現在はタイ・プーケット在住。前回訪問時、「次来る時は、事前に連絡をくれたら自分がB村まで送るよ」と話してくれていた。とても良い方である。

4) 訪問しわかったのが、DホームステイのオーナーEさんの子どもが携帯電話で遊び、携帯画面が割れるなど一部機能しておらず、同アカウントのメッセージを見ることができない状態であった。



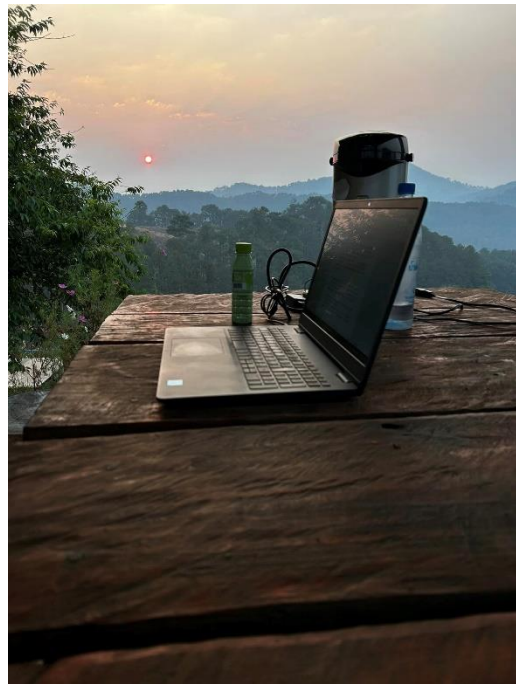
B村。日中は30℃前半、夜は20℃ほど。



村へ到着。ケン氏の実家へ。83歳。



D ホームステイ。ここから見る夜空は最高。



朝。ニワトリの声で起き、ノマドワーク。

夜明け前。



### 3. 卒業生へのインタビュー チェンマイ 2 日目 2024.3.26 (火)

今回の渡航では、ちょうど 28 日 (木) に卒業式があることがわかった (2 日目朝、学校へ行く準備をしていると、窓口となってくれている C 先生から「明後日の卒業式の準備のため、午前中は買い物に街へ出ている」と連絡があった。急遽、午前中時間ができ、リス族の子どもたちと交流ができた経緯あり)。

学校に到着し、卒業式に向けた練習を見学。なお、この時、C 先生から先述の「6 月で別の学校へ異動する」ことを伺ったため、次の窓口の先生を並行して検討。この時、2019 年 (1, 2 回目) の訪問時にドラムと一緒に叩いたり、タイの音楽を教えてくれたりした先生にも再会 (窓口の先生として検討)。

そして、卒業式の練習を終えた児童・生徒たち (小学 6 年生、および中学 3 年生) へインタビューを行った。

・卒業後について

→勉強を続ける。

・将来の夢について

→先生 (3 人)、医師 (1 人)、農業 (1 人)、警察 (2 人)、CA (「スチュワーデス」) (1 人)、ゲーマー (1 人) など様々。インタビュー対象が卒業まで在籍している (できている) 生徒たちであり (裕福ではない家庭では、そもそも勉強を続けることのハードルが高い)、これまでのヒアリング調査とはやや異なる印象を持った<sup>5)</sup>が、家庭環境によっては、あるいは卒業まで在籍することができれば、このように夢を描けることも確認できた。すなわち、子どもを取り巻く条件や環境によっては、勉強へのモチベーションを維持し、将来の夢も描き得るといえる。

・同学年 (中学 3 年生) で、学校に来ない生徒はいるか?

→1 人いる。家で宿題をしている。悪い友達の影響で来なくなってしまった。

・日本で知っていることは?

→富士、さくら、相撲、歌舞伎など。

・A 学校の児童・生徒たちのために、何かできることをしたい。何が必要か?

→トイレのドアが壊れている。一つはドアが取れており、もう一つはドアが閉まらない。学校が直すには、時間がかかる<sup>6)</sup>。

その他、生徒たちからも「好きな食べ物は何か?」「日本の生徒は、卒業したら何をしますか?」等質問してくれたり、「どら焼きを食べてみたい」「日本に旅行に行きたい。でもたくさんお金がかかるから難しい」など話してくれたりした。

---

5) 「『警察になりたい』、『医師になりたい』という子どもも、多くはないがいる」(2 回目訪問時) が、全般的に「勉強に対する意欲がない子どもが多い」。「『将来、何の仕事をしたか?』と教員が尋ねても、畑仕事以外を知らないためか、『わからない』と答える子が多い。この背景には、「マーケットやチェンマイ市街地まで遠く離れているため、職業体験もできず、本物の仕事を見たことがないからだ」とのことであった (初回訪問時の聞き取りから)。

6) 次の日、C 先生へ確認すると、政府の「修繕プロジェクト」により、トイレのドアは 5, 6 月には修繕予定であるとのこと。改めて、同生徒へその旨を伝えた (修繕について周知はされていなかった様子)。





リス族の子どもたち。フィリピンで買ったバナナチップスも大人気。



音楽の先生と生徒たち。体格がいい。



トイレのドアが壊れており、何とかしてほしいと。

卒業する生徒たちにインタビュー。「卒業式にも来てくれますか？」と。



#### 4. 前回「学校に来ていなかった」生徒についてのヒアリング① 2024.3.26 (火)

3. 終了後、改めて C 先生へヒアリング。すると、昨年訪問した「世帯の貧困問題」など家庭環境の影響により学校に来られない児童の 1 人（加藤（2024）内「H 世帯」）が、家庭環境が若干変化し、今は毎日学校に来ることができているとのことであった。

もともとの世帯情報としては以下（加藤（2024）から抜粋）

離婚による父子家庭。中国から、20 数年前に転居してきた。10 代後半の息子、小学校中学年の I さんがいる。この I さんが、学校へ行っていない様子。訪問時もベッドに横になり、スマートフォンで動画を観ている様子であった。筆者から「学校は好きか？」と問うと、父の前で「好きではない」との回答。また 10 代後半の息子は、家（農業）の手伝いをしているとのこと。家の中は暗く、また生まれたばかりと思われる猫が数匹いる様子であった。なお、父親は、いきなり知らない外国人（筆者ら）が家に来て警戒していたためか、もしくは元々の気質かはわからないが、口数が少なくうつむきがちであった。また伏し目がちで目が合わない（焦点が少し合っていない）様子であり、あくまで「個人的な印象」ではあるが、やや鬱的な様子であった。

しかし現在は、以下の状況であるとのこと。

別居の姉に子どもが産まれる。しかし姉はチェンマイ都市部で働いており、仕事に従事する必要があり、父親が家で世話をすることに。このため、昨年は父親が農業に従事していたが、現在は農地を売って生活している。姉がお金を送ってくれることもあり、現在は家庭環境が改善し毎日学校に通うことができるようになった<sup>7)</sup>。

以上のことを、筆者が C 先生へ英語で質問し、C 先生が本人へタイ語で質問する形で答えてくれた。



元気に話を聴かせてくれた。  
筆者のことも覚えてくれていた。

---

7) ただし、数年後、子どもが大きくなり姉の元で生活するようになった際に、家計状況や父の仕事がどうなるのか、またそれによる本人への影響がどうなるかなどについては、現時点から気になる状況ではある。

## 5. 教員との家庭訪問 2024.3.27 (水)

学校へ行き、C 先生とともに家庭訪問。「ヤングケアラー状態による不登校」(加藤 (2024) 内「J 世帯」) の児童から話を伺った (4. 同様、筆者から C 先生、C 先生から本人へ質問)。

- ・現在、両親がバイクで事故に遭い、首の脱臼等のため療養中。このため、別世帯の姉が 2 人、本人の世話のために家に来てくれている。
- ・母は、4, 5 年前からうつ病。症状が重篤化すると「生きたくない」「何もしたくない」といい、シャワーを浴びることも難しい時がある。
- ・うつ病のきっかけは、夫がドラッグで刑務所に入ったこと。現在は釈放されているが、それにより気分が低下し、うつ病となった。
- ・冬の期間、本人も平日 (週に数日)、働かないといけない日もある (コーヒー豆の栽培)。1 日 200 バーツ (約 800 円) ほどの収入。
- ・治療費に関しては、30 バーツ (約 120 円) で治療可能<sup>8)</sup>。医療費負担の問題が懸念されていたが、その点については姉らの援助もあり、問題がなさそうであった。
- ・C 先生は、本人を目の前に「彼女は (携帯) ゲームが好きで、怠けている lazy」と話す場面もあり<sup>9)</sup>。
- ・家では、母の世話 take care をしたり、料理を作ったりする。
- ・1 年生、2 年生を留年しており、現在 12 歳だが小学 3 年生 (4 年生?) とのこと。
- ・家庭訪問は学期に 1 度、年に 2 回行われる様子。
- ・(日本から、本世帯に何かできることはあるか?) 制服、昼食代、教科書、筆記用具等は無償である。
- ・食事については、現在は姉が用意してくれている。
- ・以前は、「将来、医師になりたい」と言っていたが、改めて聞くと「看護師になりたい」とのこと。理由は、「母の世話をしたいから」と、変わっていなかった。

以上の話について、4. 同様、先生自身も初めて聞く内容が多いように見受けられた。これらのことから、前回の訪問と同様、「教員とともに困っている世帯へ訪問し、一緒に児童・生徒から話を聞き、一緒に対応方法を検討する」ことについて、一定の意義があるように感じられた (しかし、注 1 のように先生の異動が多く、定期的に同じ先生との同行訪問は難しい現状もある)。

---

8) タイ国籍のある者は、制度により 30 バーツで治療が可能。リス族についても、同制度を利用可能であるとのこと。

9) C 先生はとても親切で、かつ教育に対して真面目な先生かと思われる。「厳しさの中に優しさあり」の先生のように見受けられたが、一方で、児童本人の前での「怠けている」という発言に、やや驚いた。

## 6. 教員へのヒアリング 2024.3.27 (水)

5. に加えて、C 先生から見た B 村の児童・生徒たちの課題についてヒアリングを行った。
- ・5. で話を聞いた児童は、まだマシな方。父親は刑務所、母親は売春のため海外へ行き、祖父母が子どもの面倒を見ている家も多々ある（渡航先はマレーシア、シンガポール、フィリピン、そして日本も含まれている）。
  - ・親は、子どもを家に一人残し、数日家をあけることもよくある。
  - ・勉強がとて遅い児童・生徒が一定数いる。その理由として、兄弟同士、親戚同士で結婚し（以下、近親婚）子どもを産む世帯がいるため。例えば、小学 1 年生 12 人の内 4 人、中学 3 年生 11 人の内 5 人が近親婚ではないかと思う（近親婚の実態については、事実確認が必要。現時点では、あくまで C 先生からのみの情報であることに注意したい。以下同様）。
  - ・近親婚は、リス族の文化である（と感じている）。教師としては、全ての児童・生徒に「都市部に行きパートナーを見つけるよう」話をしている（中学校を卒業後、高校に行く生徒はみなチェンマイ都市部まで行くため）。
  - ・途中で学校をドロップアウトしたり、高校へ進学しても中退したりしてしまう生徒も一定数いる（昨年度 8 人が卒業し、2 人が高校進学するも 1 人は 2, 3 か月で退学した）。
  - ・「（国際福祉教育において）我々は、児童・生徒たちにどんなことを伝えられるといいか？」  
→勉強の大切さや日本の生活について話しをしてほしい。広い世界を彼らに知ってほしい。
  - ・Tik Tok や Facebook など real ではない世界に夢中になっている。先生が写真を撮ると、「顔を加工してほしい」と話す。自分の顔に誇りが無い子どもたちが多いことも大きな問題であると感じている。
  - ・ある世帯では、生徒の母、叔母、姉が整形のために出稼ぎに行っていた。
  - ・2 か月前に、麻薬（アンフェタミン 1,400 万錠）の輸送で捕まった生徒がいる。また家で大麻を育て、自身で吸ったり販売したりしている生徒もいる（男女問わず）。スクールバッグに大麻が入っていたこともある。B 村前の道路は、麻薬の輸送ルートとなっている。
  - ・B 村では、大人も子どもも関係なく、たばこや酒、コンドームを購入することができる。
  - ・村長（50 代後半の男性）もいるが、特に何もしていない（と感じている）。

その後、生徒が栽培している大麻を見せてもらう。C 先生曰く、彼は自分でも吸うし、売っている、と（吸う際は花の部分ドライして吸うとのこと）。葉っぱはスープに入れて食べることもあり、現在はコンビニで大麻ジュースを飲むこともできる状況。中卒で大麻の農家になる人もいる様子（合法か否かは不明）。





同行訪問が、今後何かにつながるというなど。



英語⇄タイ語で通訳してくれる。



1 時間以上話を何う。C 先生も真剣。



「応援しているよ」と伝える。

生徒らが家で育てている「葉っぱ」を見せていただく

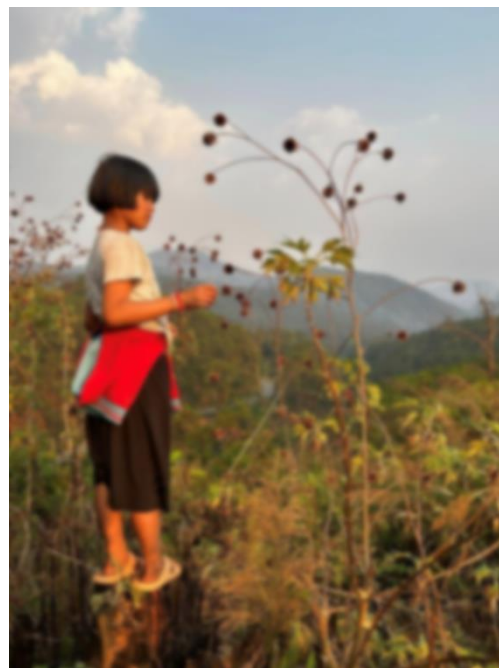


## 7. 子どもへの個別ヒアリング 2024.3.27 (水)

6. ヒアリング後、B 村へ戻り休憩。そこで、昨日一緒に遊んでいた子ども（10歳の女儿）に話を聞くことができた。

- ・両親、13歳の兄との4人暮らし。
  - ・将来の夢を聞くと、「ない」と。「なんでないか？」と聞くと、「わからない」と。
  - ・叔母が亡くなったため、母が中国まで葬儀に行っている。父は農業に従事しており、兄も友達の家へ遊びに行っており、いつ帰ってくるかわからない。「しばらくは家に1人」だという。
- ここでも、先ほど言っていたC先生の話（親が子どもを置いて数日家を空けることが日常的に起こること）を実感。本人も悲しそう、寂しそう顔。
- ・行ってみたいところは？と聞くと、首を横に振る（わからないか、ないかは不明）。
  - ・どんな時に幸せか？と聞くと、「両親に料理を作るときが幸せ」「スパゲッティが得意」とのこと。
- 別の世帯の子どもたちが帰ってくる。楽しそうに遊ぶ姿を見て少し安心。

土地は広く、子どもたちだけで遊ばせていても安心ではあるが、違う家族の子どもが小さい子の世話をする様子も多々見られる。



午前中（写真左）とは様子が違い、寂しそう顔をしており、色々話を聞く。



## 8. 卒業式への参加 2024.3.28 (木)

中学生が約 10 人、小学生が約 24 人卒業。人数比として、やはり途中で学校を終える（ドロップアウトしてしまう）子もいる可能性があることを改めて感じる。

- ・昨日作った紐を卒業生らの手首に巻いてお祈り。
- ・泣いている生徒も見受けられた。
- ・制服に寄せ書きタイム。書いてほしい！と言われ、筆者らも書かせてもらう。
- ・お金の花束が印象的であった。
- ・去年会った人たちにも再会。知った顔がどんどん増えていく感覚が嬉しい。
- ・卒業式が終わる。C 先生が 6 月に異動するため、新しい先生と連絡先を交換。つながりの連鎖で成り立っていることに改めて感謝。
- ・夜、生徒が写真を持ってきてくれる。先生からとのこと。先生へお礼を伝えると「Your visit gave the children great motivation to study.」とのこと。素直に嬉しい。これからも続けていきたい。



集合写真。タイ語で「おめでとう！」と伝える

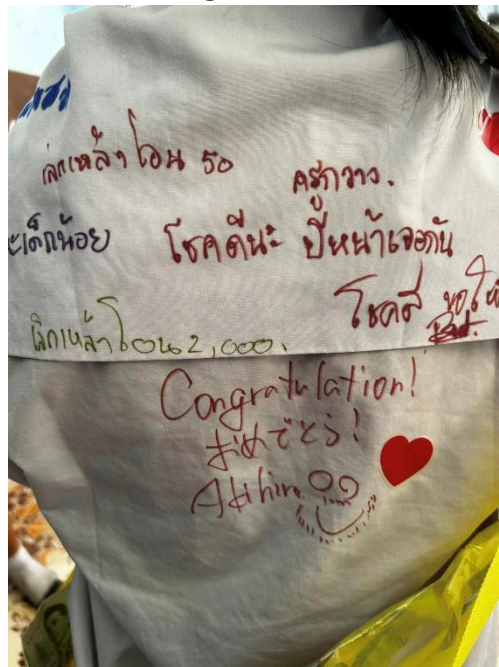


卒業生と。みんないい笑顔。おめでとう！

卒業生のためにお祈り。一緒に参加。



Congratulations!!



## 9. チェンマイ在住の日本人へのヒアリング 2024.3.29 (金)

チェンマイ最終日。村の子どもたちに挨拶をしまわり、フィリピンで買ったフェアトレードのぬいぐるみを子どもたちへ配る。そして村を出発。バスを乗り継いでチェンマイまで行く算段だったが、バスが満席であり、D ホームステイのオーナーEさんが空港まで送ってくださることに。

加えて、Eさんの姉が日本人と結婚してチェンマイに住んでいるとのこと、急遽お時間をいただき夕方義兄にお会いできることに。村からチェンマイまで向かう途中、Eさんの義兄が以前住んでいた空き家に寄る。「この家を買いませんか？」と。少し気持ちが揺らぐ。

その後、道中「チェンダオ洞窟に寄っていきますか？」と。今回の渡航で初めての観光。1時間ほど満喫。そしてカフェに寄り昼食。コーヒーが美味しい（しかしご飯は、リス族の手作り料理の方が美味しかった（p17 写真参照））。ここで、Eさんから「奥さんはいますか？」と。妹を紹介したい様子。またまた心が揺らぐ。

また同行した学生から「行動力とコミュニケーション力があれば何とかなることを学びました。進路変更し、ソーシャルワーカーを志したいです」と。学生の前向きな変化が嬉しい。

そして、ワロロット市場に寄り、小一時間散策後、チェンマイ在住の日本人（以下、Fさん）と合流。ご自身のことや、チェンマイの文化、リス族のこと（タイ国籍の有無、医療体制や国家福祉カードの詳細、コミュニティ健康管理者の存在）など先行研究を手掛かりに色々質問させていただき、これまで以上にリス族の生活の輪郭が見えてきた。

- Fさんは現在 70 代。60 歳で定年退職後、英語の勉強をしたいと思いサンフランシスコ、オーストラリアなど渡航先を検討。その中でチェンマイ在住の日本人から話を聞く機会があり、興味を持つ。半年ほど日本でタイ語を勉強した後、タイのパーヤップ大学でさらにタイ語を勉強。その中で、知り合ったタイ人の紹介で現在の妻（リス族）と出会い結婚。現在中学生の子どもがいる。
- B 村などチェンダオはコーヒー豆の産地である。前国王（9 代目）の指導により麻薬、ケシの花等の栽培の代わりにコーヒー豆や農作物を市場へ提供できるようになった。B 村のあるチェンダオは高地であり、寒暖差が激しいため美味しいコーヒー豆が栽培できる。コーヒー豆は、苗を植えてから収穫まで 3, 4 年かかる。12 月下旬から 3 月頃までが収穫時期である。
- 現在、チェンマイの大気汚染は世界最悪である。ドーイ・ステープ（山）も 5 月頃までどんよりしている。雨季をすぎると空気がきれいになり、そこからチェンマイへ来る人も多い。
- リス族については、タイ国籍はある。タイヤイ族など、一部 ID カードがないまま大人になり、病気やけがをした時などに保障を受けられない山地民もいるが、リス族は多くがタイ国籍を持っていると思われる。
- （医療体制について）病院は、やはり村から 30km ほど離れている。ミャンマーとの国境付近にも「一応」病院はあるが、医師の質は必ずしも高いとは言えない。「構わない」「大丈夫」「仕方がない」「なんとかなるさ」等の意味を持つ「マイペンライ」と医師から言われ、次の日死亡した人もいる。  
タイでケガをし病院へ運ばれると、外国人（日本人）などは「お金がありますか？」と聞かれる。海外保険などに入っていればいいが、そうでないと、受入れ拒否をされることも往々にしてある。  
一方、タイ国籍があると、公立病院にて 30 バーツで治療を受けられる。入院加療も同様。また透析など定期受診が必要な疾病でも、一度支払いをすれば、それで治療を受け続けることができる<sup>10)</sup>。



- ・タイ人は、時間にルーズである。9時に会おうと約束しても、必ず過ぎる。学校の父兄会でも10時開始であれば、10時45分くらいから始まる。遅く来る人は、いばっている人たちが多く。
  - ・（年3回までを限度とした2000-3000バーツの給付金を支給する制度（江藤，2019；2020）はあるか？）政府から見た貧困世帯（政府により銀行預金を調べられ、預金が少ないと対象となる）に対して給付がなされるかと思われる。
  - ・リス族も、多くは口座を持っている（オンライン口座）。配達サービスを利用し買い物をしたり、Wi-Fi環境が発達しておりどこでも利用可能であるため、多くのタイ人は携帯電話を持っている。年間2,000バーツ（約8,000円）、月額であれば数百バーツで携帯電話を持つことができる。
  - ・リス族の中には、農業以外の副業（例えばE氏のようにホームステイ）をして収入を得ている人もいる。またミャンマーから大麻の密輸に関わっている人もおり、警察に見つかったら銃の撃ち合いになることもある。農業など肉体労働に従事し、その疲れを取るために大麻を吸う人もいる様子。
  - ・（国家福祉カードについて）銀行に10万バーツ（約40万円）以下、毎月の収入が300バーツ（1200円）以下の場合、年間3600バーツ（約14,400円）がもらえる。F氏の妻の両親も、以前はもらっていたが、現在はもらっていない（貯金額が支給条件を上回ったため）。
  - ・（オーソーモー<sup>11</sup>）はいるのか？）タイでは「オーボートー」という。村長、オーボートーともに選挙制である（関わりがあるかは不明）。
  - ・リス族の親の多くは、日銭を稼ぐために農業や家事を優先させており、教育をあまり重要視していない。
  - ・学校は3月～5月中旬まで、および10月が休みで、11月から後期が始まる。
  - ・近親婚は、あまりないと思われる（C先生と見解の相違が見られた）。
- ※後日、改めてFさんから「その後、聞いてみたら（近親婚は）少しあるようです」とのこと。
- ・タイ人の男性はたばこ、酒、賭け事が好き。女系社会であり、家で居場所がない男性が離婚することもある。
  - ・リス族では、例えば「誰かが家を建てる」となれば、近くに住む男性は皆手伝うなど、冠婚葬祭全てについて「運命共同体の精神」で協力する。またリス族の一般家庭では、日本と異なり、「おやすみ」「ただいま」などの挨拶をする習慣がない。気付いたら家を出ており、気付いたら帰ってきていることもある。
  - ・リス語は書き言葉がない。YouTubeなどでリス語を話す人はいる。
  - ・リス族の子どもは学校でタイ語を習う。現在50代以上の人はタイ語を知らない人もおり、子どもが病院などで通訳をすることもある。

---

10) 「けがをした時などの治療」も行っていると話していた先生の異動があったが、医療体制に大きな影響は村内では見られなかった（C先生へヒアリングはできなかった）。また今回の渡航では、病院はやはり遠いが、リス族はタイ国籍を持っていることから、安価で医療を受けられる制度の対象にリス族も該当することが確認された。なお、村民全員が対象となるかは要確認（村内にはタイアイ族もいるとの情報もあったため（訪タイ報告書③参照））。

11) 2015年にタイ政府がオーソーモーを「コミュニティ健康管理者」として養成する方針を打ち出した結果、全国で100万人を超え、1人が自分の所属する地域コミュニティ内の10-13人程度の高齢者や病人の健康管理を担当している（江藤，2020：99）。



D ホームステイ。1 人 1 泊 400 バーツ（約 1,600 円）。とてもよく眠れる。



F さんが以前住んでいた家。拠点として検討。



F さん。突然にも関わらず、お土産まで。感謝。

D ホームステイのオーナーE さん。鹿、イノシシのハントが得意で、誘われる。



## 10. まとめ

前回訪問した「貧困や親の病気のケアなど、世帯の影響による不登校世帯」の現状について確認することができた。一世帯は、家庭環境の変化（別居家族の出産、農地の売却など）により現在は登校できていることが確認された。もう一世帯は、交通事故により両親の状況は悪化しつつも、親族の支えにより生活を維持している状況であることが確認された。

加えて、前回と別の教員との家庭訪問を行うことで、①教員は現状、家庭環境に困難を抱える児童・生徒の状況を必ずしも把握できているわけではないこと、②リス族の文化的背景（近新婚やドラッグ、出稼ぎの問題など）やそれに対する教員の問題意識も確認できた。

また子どもたちへのヒアリングからは、卒業時まで在籍できるなど、子どもを取り巻く環境によっては夢を描ける子も一定数いることがわかった。

日本人へのヒアリングからは、タイ国籍の有無、医療体制や国家福祉カードの詳細、コミュニティ健康管理者の存在など、リス族の生活の輪郭が以前より明確に浮かび上がってきた。

さらに今回は、卒業式に同席をさせていただくことで、校長、教頭先生をはじめ他の先生方にも筆者を認知いただくことができたと考えられ、次の国際福祉教育に向けた準備として一定の成果を得られた。

今後、今回確認された事項について先行研究と照らし合わせてその文化的背景への理解を深めつつ、引き続き訪問を継続して不登校世帯など課題を抱える世帯の状況を注視していきたい。なお、この点について、教員に同行訪問を依頼し、教員とともに話を聞くというスキームに一定の意義があると考え、今後も実施を検討していきたい。加えて、加藤ゼミ内において国際福祉教育の内容について検討を深め、次回の実施（2024.8月もしくは9月を予定）に向けて準備を進めていきたい。

## 11. （補足 1）同行した学生について

同行した学生からは、以下のようにメッセージをもらった。

加藤先生、5日間本当にありがとうございました。この5日間、村で学んだ事もたくさんありますが、それ以上に先生から学んだ事がたくさんありました。私がソーシャルワーカーになりたいなと思ったのも、加藤先生のひたむきな姿を見たからです。人から人へとどんどんネットワークが繋がっていく様子を初めて見て、本当に感激しました。タイ語や英語が伝わらない事もあるけど、想いがあれば相手に伝えられるんだなぁと感じました。先生から学んだのは、行動力！コミュニケーション！感謝！です！思い返すと、このタイ行きが決まったのも先生に話しかけたからだったなぁと思い出しました。

そして、頑張りたいこともできました！・・・（中略）・・・動いてみようと思います。

また、もう少しソーシャルワーカーについて調べて、事務やキャリア支援センターに相談をしてみようと思います！加藤先生、この5日間本当にありがとうございました。・・・（中略）・・・先生とチェンマイに行ったことは、私の宝物です。これをもっと磨いていけるようにこれから頑張ります・・・（以下、略）。

同学生は進路変更し、卒業年度は遅れるが、ソーシャルワークを一から勉強し、ソーシャルワーカーになりたいという。ぜひ、応援したい。



## 12. (補足 2) その他の活動写真

今回の渡航における、上記 3. から 10. に該当しなかった行程での写真を数点掲載する。

B 村や D ホームステイの様子、食事内容など参照いただき、タイ・チェンマイ (チェンダオ) についてのより詳細なイメージを持っていただきたい。

チェンマイにあるいつもの店 (Aroon Rai) で、  
ゲーンハンレーとグリーンカレー。もち米は手で食べる。



アウトリーチ中に財布を拾う。



村から少し歩いたところにあるマーケット。  
品ぞろえがよく、たいていのもので買える。



財布の持ち主を探しに、Eさんと。  
中には移民カードが。  
持ち主の知り合いに出会えた。







Eさんの妻が作るリス族の料理は、どれも本当に美味しかった。自家製のお酒もいただいた。



Eさんら夫婦の営むカフェ（写真下）。

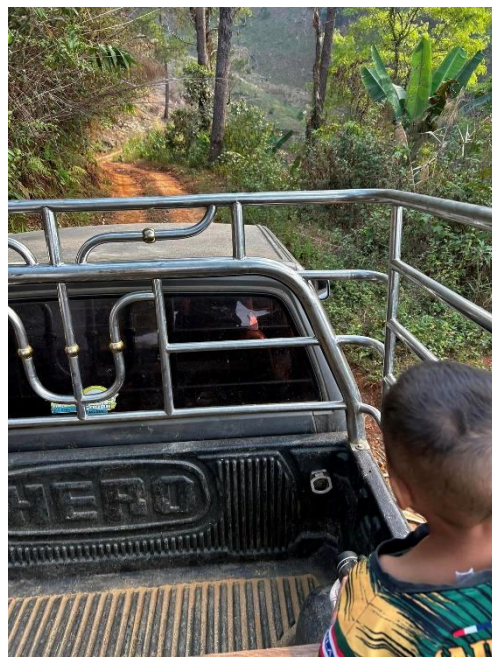
この2階のテラス席（写真中段右）や、山頂の宿から食べる朝食は最高だった。







ホームステイ付近の犬たち。



移動は基本ピックアップトラックかバイク。



シャワーとトイレ。慣れると水がとても気持ちいい。

子ども達とバイバイ。今回は時間的余裕があり、村内の子どもらとの交流の時間がたくさん持てた。



### 13. (補足3) 今後の活動予定について

〈2024年度〉

現地調査を継続し、困難を抱える子どもたちやその世帯の状況把握、および教員の取組みの状況を確認していく。また並行し、地域支援実践として国際福祉教育を行う（8, 9月頃を予定）。

〈2025年度〉

困難を抱える子どもたちやその世帯について、教員や村人とも協働し個別支援を行う。

また並行し、国際福祉教育実践（2年目）をさらに展開していく。

〈2026年度〉

これまでの個別支援、地域支援実践を振り返り、継続しつつ、困難を抱える子どもやその世帯、地域課題に対するソーシャルアクションを展開していく（「学習意欲の低い子どもたち」など子ども全体への働きかけの検討）。

加えて、日本において国際協力オンライン交流授業の準備を行う（日本側の受け入れ体制の整備、事前学習プログラムの検討・実施）。

〈2027年度〉

個別支援、地域支援実践（ソーシャルアクション含む）を展開しつつ、国際協力オンライン交流授業として、日本の小・中学校とのオンラインを通じた相互援助活動を展開する。

〈2028年度〉

個別支援、地域支援実践を展開しつつ、これらの活動が地域内で維持・継続されるための「継続性を担保するための仕組み化」を検討していく。

またこれらの活動・および研究においては、コミュニティソーシャルワークの手法に注目しつつ、コミュニティディベロップメントやコミュニティオーガナイズングとの関連性など、理論的な焦点を明確にしつつ検討を進めていきたい。

なお、本報告書では、顔の写っている写真については基本的にぼかし加工を施した。

また小学生を「児童」、中学生・高校生を「生徒」と記載し、学校に関係のない文脈では「子ども」と記載している。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。  
また本プロセスに関わるすべての人に、感謝申し上げます。

加藤 昭宏

<参考文献>

江藤双恵（2019）「第 12 章 『女性に優しいコミュニティ福祉』は可能か——タイ国コンケン県バーン  
プー自治体の事例から」『東南アジアにおけるケアの潜在力』京都大学学術出版界：411-441.

江藤双恵（2020）「タイの社会福祉」原島博編『新 世界の社会福祉 第8巻 東南アジア』：75-  
121.

加藤昭宏（2019）「訪タイ報告書」

[https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a\\_kato01.pdf](https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato01.pdf)

加藤昭宏（2019）「訪タイ報告書（2回目）」.

[https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a\\_kato02.pdf](https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato02.pdf)

加藤昭宏（2023）「訪タイ報告書（3回目）」

[https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a\\_kato03.pdf](https://www.doho.ac.jp/images/pdf/professor/a_kato03.pdf)

加藤昭宏（2024）「タイ・チェンマイの中山間地域におけるメゾ・マクロ実践に関する予備的調査」  
『同朋福祉』（31）：135-157.